

エンカウンター (ENCOUNTER)

第262号

2024年2月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (7)

わたしのようになって欲しい

「兄弟たちよ。願います。どうか、わたしのようになってほしい。わたしも、あなたがたのようになったのだから。あなたがたは、一度もわたしに対して不都合なことをしたことはない。」(ガラテヤ4・12)

ここの強調点は、わたしのようになってくれ、願います、ということであり、初めに「なってくれ」が出ています。ギリシア語では最も強調されている言葉です。「わたしも、あなたのようになった」というのは、パウロは昔、律法・道徳にかじりついており、これが命に至る道と信じて、そして、律法・道徳の欲に縛られていた。しかし、イエス・キリストの福音を信じてから、律法・道徳から解き放たれました。律法・道徳の時代には、異邦人と一緒に食事をするなど、異邦人と共に暮らすということは、律法に反する、神に反することとして縛られていたが、それを振り捨てて、異邦人員は、異邦人のようにな

り、君には君のようになった。これは福音を受けて自由になったから出来たのである。私はそのようになっているのだから、君達も、私が自由になったように、自由になってくれ、と。自分の例をあげまして、みんなに勧めているところであります。これは命令ではありません。お願いであります。私は君たちに懇願する、と言っております。パウロは、福音の与えるところの自由が、如何に自由に満ち、力に満ち、命に満ちているかということをよく知って居りました。

パウロの持病

「そして、わたしの肉体にはあなたがたにとって試練となるものがあつたのに、それを卑しめもせず、またきらいもせず、かえってわたしを、神の使いかキリスト・イエスかでもあるように、迎えてくれた。」(ガラテヤ4・14)

ガラテヤ人がパウロから初めて福音を聞いた時、彼らは本当に熱心をもって、また、愛情をもって受けました。そのことを書いて、それを思い起こさせて、そして福音の自由人になれ、ということをここで言いました。パウロの病気に関してはいろいろの説がありましたが、大体マラリヤのようであつたらしい。熱が出て、てんかんのようになるのですから、当時には病気は悪魔の仕業であり、病気に罹る者は神から見放された者であるという解釈がありました。

そうであるのに、私を神の使いか、イエス・キリストでもあるように迎えたとあります。神の使い、神から来た使い、あるいはイエス・キリストご自身であるかのように迎えた。ガラテヤの人々に福音が分かつたのは、このような精神でパウロの話聞いていたからであります。

我々に信仰がないというのは、牧師、信者の両方の責任です。両方ともに、これは神の福音であるという信念がない。説いている方でも確信がないし、また、聞く方も牧師の批判をしながら聞いています。そのようなことでは福音が伝わる筈はありません。

第1の感想（偽教師について）

ここに出て来る偽教師というのは、パウロの福音だけでは不十分である、福音にプラス善行、律法・道徳、行いが無ければ、永遠の生命を得て救われることはないと言う。これが偽教師の主な主張です。しかし、我々にとって、神の子とされ、「アバ、父よ」とよぶ、この永遠の救いに入るには、善行が条件であるかどうかということは、我々の実験が証明してくれます。パウロは神の子とされ、永遠の生命を頂いたら、イエス・キリストを救い主として、永遠の生命を賜物として受けた。そこにおいてパウロは永遠の生命を発見しました。それに何かをプラスしなければならないということは、この永遠の生命を受けた経験の無い人が言うことです。善行したら神が喜ぶということは人間の考えです。善行すれば神は喜ぶでしょう。しかし、善行は神の永遠の生命を勝ち取る条件とはなりません。条件はただ一つ、「イエス・キリストの救いを信じること」であります。これを「福音」という。

本当の教師と偽教師の区別

我々には、本当の教師と偽教師との区別は出来ません。私の区別の仕方をお教えしましょう。イエス・キリストは、「良い樹はよい実を結び、悪しき樹は悪しき実を結ぶ」と言われました。その樹を見たらその差が分かる。しかし、偽教師はそんなに悪いことはしません。善行だけ見ていたらそれは分かりません。私が思うに、本当の教師は万人ができることを教える。万人が手の届くことを教えます。源信、源空、親鸞というような人は、「妄念の中から、心乱れたまま、念仏せよ」と言われました。これは万人に可能です。座禅もまた万人に可能です。万人誰でも出来ることを教える人は大先生です。我々が実行できないことを教える人はまだまだ修行途中の先生です。

然らば、小西は何を教えるかと言えば、イエス・キリストを救い主と信じて、目の前に落ちてくる仕事を力一杯やりなさい。これです。これは万人に可能です。しかし、終生これをやり通すことは困難です。これはやはり、永遠の生命、天国へ行くという希望がなければ続きません。私は 50 年間それをやってきました。諸君もやって見給え。どんな仕事でも。人が喜ぶからとか、給料が上がるからでもよい。一所懸命にきなさい。私は大先生でもなんでもありません。万人が可能なことをするよう、大先生を真似しているにすぎません。

サラの子、ハガルの子

「そのしるすところによると、アブラハムにふたりの子があったが、ひとり
は女奴隷から、ひとは自由の女から生まれた。女奴隷の子は肉によつ
て生まれたのであり、自由の女の子は約束によって生まれたのであった。」

(ガラテヤ 4 : 22-23)

これが比喩の中心的真理になります。女奴隷ハガルの子は普通の人間関係に
よって生まれ、自由の女サラの子は、神の約束によって生まれた。勿論、肉体
から生まれましたが、これは神の約束によって、生まれるべき能力のなかった
年令の肉体から生まれた。このことは、私はイエスの誕生、すなわち、聖霊に
よって生まれたことを暗示しているように思います。私は比喩として深い意味
を表している旧約の事実ではないかと思えます。…我々は永遠の生命を得て、
そして神の国の一員として、イエス・キリストの復活と同じ永遠不滅の命を頂
き、その所有者となるというようなことは不可能なことであります。人間の側
から見ると不可能なことを神が福音をもってするという。これがキリスト教の
福音であります。…救われるのは、神の契約、すなわち、神の方からの贖い
によって、神の子とする、という神の賜物です。…信仰が浅いから、救われてい
ないというような話は厳禁です。受けるか受けないかの問題です。「後なる者
は先になり、先なる者は後になる」と言いますが、何十年やってもこれを
うけなければ落第です。受けたら、今日からでも、誰でも及第です。…

新約は旧約を補う

「しかし、聖書は何と言っているか。『女奴隷とその子を追い出せ。女奴隷の子は、自由の女の子と共に相続してはならない』とある。」(ガラテヤ 4 : 30)

これは、正妻のサラが夫のアブラハムに言った言葉です。即ち、正妻が女奴隷ハガルとその子を追い出して下さい、と。それを聞いてアブラハムは非常に悲しんだ、と書いてあります。それはそうでしょう。アブラハムにとっては、二人共自分の子供ですから。妻を異にすることによって、片方は光栄ある地位になるし、片方は追い出されるのですから。イサクが相続して、イシュマエルは追い出されて、アラビヤに住んで、神からの祝福を受けなかった、という事実があります。そのように、福音を受け取る者は、時来たらば、永遠の天国に迎えられ、救われる。一方、律法にとどまっている者は滅びる、と。これは非常に不公平のようですが、真理は真理です。…私を感じますのに、アブラハムがイサクを相続人とし、イシュマエルを追い出したことを悲しんだと書いてあるように、我々滅ぶ者に対しても、天の父は耐え難き思いであると思います。…それゆえに似こそ、神はイエスをして下して、十字架につけさせました。

新約と旧約は、二つの別のものと見るよりも、新約は旧約を補って、旧約によって滅ぶ者を憐れとあって、新約が出来たと思っ

道徳に真剣に取り組んだとき、罪人であるということが分かる

我々は、律法と福音の関係について、長い間ロマ書で勉強してきたように、律法あるが故に、律法によって追い出されて、福音に食いつくようになる。それ故、律法は福音の前提と見てよい。不品行というものは、信仰に入る前提です。不品行と信仰とは連なっています。別ものではありません。同じ線上につながっています。そういうことを今までガラテヤ書で学んで来ました。…この前まで言ってきたことは、律法というものは家庭教師のようなものである。即ち、成人になるまでは、後見人として律法によって束縛しているけれども、いよいよ成人したら、その権利を得るまで自分で頑張る、と言っています。パウロは、律法・道徳の重要な作用というものは、福音にまで人間をずっと連れていくことである、と言っております。福音が分からないということは、道徳に真剣でないからであります。これはもうはっきりしています。ふらふらしていて、福音は分かるものではありません。道徳に真剣に取り組んだ時に、我々は罪人であることが分かる。そうだから、我々は福音の方へ行くことになります。

福音から来る御利益の第一——キリスト者の自由

第5章の1-12節は、福音のご利益の一つとして、そういうご利益があるから、みなさんに勧めると言っている箇所であります。その第1は「自由」、「キリスト者の自由」であります。この「キリスト者の自由」については、本日学び、明らかになりますけれども、これは即ち、人間は皆しばられている、道徳にしばられ、仕事にしばられ、名誉にしばられ、財産にしばられ、地位にしばられ、がんじがらめになっている。自分では、しばられているとは感じませんが、人間は縛られている。真の自由が無い。ところがパウロは「自由」「キリスト者の自由」、これが福音から来る御利益の第一であり、その御利益にとどまれと言っております。

キリストから賜る自由に留まれ

キリスト教の信仰というものは、我々が理解しているものと大分違います。キリスト教というものは、誰でも行ける道となっています。本当に真剣に聖書を読むならば、誰でもこの聖書に食いつくことができる。可能です。どんな無学者でも、道德のある人でも、道德のない人でも、聖書に食らいつけるようになっている。今日の一節でも、キリストが福音によって下さる自由によって私達を解き放した、と言う。そうであるから、この世のもの、名誉、自分の健康、そういう我々の肉のものによって縛られるな、福音に堅く立て、キリストから賜る「自由」に留まれ、と言っているのであります。

福音の有難さは、われわれが死ぬとき分かる

「見よ、このパウロがあなたがたに言う。もし割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに用のない者になろう。」(ガラテヤ5:2)

割礼は律法の代表的なものでありますから、ここに割礼をもってきました。日本であつたら、忠君愛国が代表的な道德です。…パウロは、忠君愛国ということが救いの条件ではない、ということを行っているのであります。…

理性では、人間は道德を守る事が救いの条件であると考えます。道德を救いの条件としていないということが、キリスト教の福音の特徴です。生まれつきの人間はこれを理解できません。善ということが救いの条件となっていないなどということは、我々の理性からすれば迷信となって来ます。パウロは繰り返し言っています。我々永遠の生命を得て、神の子とされるのは、イエスの福音を信じることだけである、と。この福音の有難さは、われわれが死ぬ時分かります。内村先生も、人が三途の川を渡る時に分かると言われました。我々の理性はこれに反対します。我々は善行を行う力がなくせに、救いの条件として善行を持ち出したい。これが人間の本性であります。

キリストの特徴は聖霊にある

「律法によって義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまっている。恵みから落ちている。」(ガラテヤ5・4)

律法・道徳によって神の前に義とされようとしているあなたがたは、キリストの福音から離れてしまっている、福音が分かっていない、と言う。この「恵み」という字にも定冠詞がついていまして、十字架の贖いによって永遠の生命を得るという恵み、その恵みから落ちている、と言う。これは、深い、福音の根本に関する問題であります。…福音に頼るということは、神の力に頼るということでもあります。聖霊に頼ることでもあります。この差異が人間にはわからない。…キリストの特徴は聖霊にあります。神の霊にある。律法・道徳にかじりついている間は、人間の力のみに頼っているのですから永遠の生命の悟りというものがある筈はありません。

日本においても、大宗教家の言うところを聞いてみてください。律法・道徳を超えたところがあります。法然は、「妄念のままで念仏せよ」と言いました。道元は「座れ」と言いました。これは誰にでもできることです。宗教という者は律法を越えている。我々はこれが分かりません。律法・道徳にかじりついていますから。何年経っても分からない。永遠の生命が臨んでこないのです。